

阪神から東北へ…KSCの震災活動

福祉ボランティア 高まる期待

学長 今井鎮雄

1977年、まだ日本社会が経済成長や効率が優先し、物質的豊かさを追い求めていた頃、神戸市は「神戸市民の福祉をまもる条例」を制定し、市、事業者、市民が一体となって福祉の主体者となり、市民の福祉を推進しようと呼びかけました。

市民自らがボランティアとして福祉の担い手となり、まちづくりに参画できるようにと、神戸市は福祉ボランティア養成のためのカリキュラムと施設を備えることを考えました。こうして、1993年9月、「しあわせの村」の一角に神戸市シルバーカレッジが開校しました。



95年2月、カレッジホールで救援物資の仕分け作業をする学生たち

そして1995年1月、阪神淡路大震災が起り、シルバーカレッジは救援活動のためにキャンパスを提供すると、カレッジ生は進んで校舎を飛び出し、自ら被災地へ出かけて被災者に寄り添い、生きる勇気を取り戻す手伝いをしたのです。阪神大震災を機に、私たちは、人間の幸福とは単に金を儲けることでもモノを多く持つことでもない学びました。

建学の精神あふれる活動

このときボランティア活動に従事した学生諸兄弟姉が中心となって、カレッジ卒業後の1997年、社会還元センターグループ〈わ〉が設立されました。シルバー

カレッジの建学の精神「再び学んで他のために」のもと、メンバーは地域社会の中で、小学校での学習支援活動、三世代交流による文化の伝承活動、環境保全活動など幅広い活躍を続けられています。

2011年3月の東日本大震災のあと、グループ〈わ〉は被災地支援のための募金活動、また東北支援チームを結成して被災地へ赴かれるなど、1995年以降の神戸での震災ボランティアとしての経験を活かし、被災者に寄り添い、支えとなくなりました。

カレッジ生のさらなる挑戦

「KSCの震災支援シンポジウム」は、その寄り添いの結実であり、まさしく神戸市シルバーカレッジの目指してきたことの集大成であり、カレッジにつながる人々の誇りとするところでありましょう。

ドラッカーは『非営利組織の経営』の中で「世界の大きな変化の中で再び機能的な組織体制を世界が持つには百年はかかるだろう。この変化を新たな時代が機能するまで、時間を繋ぐ役割はボランティアが担うのである」と言います。

世界に先駆けて近未来に超高齢社会を迎える日本では、他者に寄り添う社会、人と人が互いに支え合う社会を築くために新たな福祉文化の構築が求められ、それを担う福祉ボランティアへの期待がますます高まっています。

「再び学んで 他のために」は、これからの社会では神戸市シルバーカレッジの建学精神を超え、より深く広い意味を持つことになるでしょう。シルバーカレッジ生、卒業生の一人ひとりがいま向き合っている福祉ニーズへの挑戦は、時代が抱える課題の解決への手がかりになるものであることを思い、グループ〈わ〉の皆様のさらなる活躍を期待するものです。

(10月9日の「震災支援シンポジウム」の学長挨拶から)

●「やあ生きていたんやね」阪神大震災を語る 2～4P

●東北支援チーム奮闘記 5～7P

「やあ、生きていたんやね」

阪神大震災 先輩4人が激白

1995年1月17日早朝、神戸の街は一瞬にして壊滅状態になりました。忘れもしない阪神淡路大震災。開校2年目のカレッジは救援基地となり、学生たちは率先して支援活動に飛び込みました。村内で、避難所で、自治会で。できる活動を、できる場所でやろうと共助の輪はどんどん広がり〈ボランティアのKSC〉はスタートを切ったのです。グループ〈わ〉は「震災支援シンポジウム」開催にあたって、卒業生十数人から当時の体験談を伺いました。その体験はその後の人生にどんな影響を与えたのか、後輩に伝えたいことは何か。4人の先輩に胸中を語ってもらいました。（広報・井口久美子）【文中敬称略】



後藤慶子（福祉1期・北）



宮城智子（音文2期・兵庫）



細野恵久（福祉3期・須磨）



飯井冴子（元事務局）

——震災発生時、どんな状況でしたか。

細野 入学して4か月。発生時は布団の中にいましたが、神戸で地震？「まさか」とびっくり仰天。自宅は、屋根瓦がずれた程度で大した被害はありませんでしたが、テレビで都市機能がマヒしていることを知り衝撃を受けました。

宮城 細野さんと入学は一緒です。私の家も大きな被害はなかったのですが、片付けや修理をしながら、クラスメートの安否確認に走り回りました。入学直後に作成した、住所録と写真は大いに役立ちましたね。

飯井 自宅は補修程度の被害ですみましたが、水道、ガスは1か月間ストップ。カレッジへの交通手段がなく、代替バスやタクシーを乗り継ぎ、3～4時間かけて出勤していました。道で知り合いに出会うと「やあ、生きていたんやね」が挨拶の言葉でした。

後藤 大変でしたね。私は北区在住のため、ほとんど被害はありませんでした。クラスの安否確認は割と早くに行われ、全員無事だったので、安心したことを覚えています。

飯井 カレッジ事務局でも、在校生（1・2期生）の安否確認を最優先しました。幸い学生さんは全員無事でしたが、音文の講師が亡くなられ、強烈なショックを受けました。

村内で、避難所で、施設で活動

——ボランティア活動を始めたきっかけは。

宮城 私は音文なので、コーラスでボランティアをしようと楽器を持ちよって、クラスのみんなで練習に取り組みました。初めての慰問は老人ホームへ…徐々に活動先を広げていきました。

後藤 1月末でしたか。「村の温泉が無料開放になるので、案内・整理など手伝ってほしいか」と呼びかけがあり参加しました。

細野 私は、市内の惨状を知り「何かできることはないか」と区役所へ相談。紹介された避難所で、カレッジの仲間3人と8月半ばの閉鎖まで活動を続けました。

——日々、被災者はどんな様子でしたか。

後藤 温泉には毎日、たくさんの人たちが押しかけ、建物の周りまで長蛇の列でした。雪の降る日は本当にお気の毒でしたが、お風呂上りに赤みのさした顔を見て、一緒にホッとしたものです。

細野 避難者の関心は物資のことから、風呂やトイレなどへ、だんだん変化していきました。この経験を通して、被災者のニーズを的確に汲み取り対応することが、きわめて大切であることを学びました。ボランティア活動を円滑に進めるには、コーディネーター機能が重要ですね。



――活動中の食事、交通手段は。

後藤 お弁当を持参し温泉のロビーで。村へはバイクでしたね。

細野 私も、弁当を持参しましたが、泊まりの時は支給してくれました。自宅から避難所の東須磨小学校までは、徒歩・地下鉄・徒歩で、ずい分時間がかかりましたよ。

宮城 私達もお弁当持参でしたね。交通手段は自家用車に分乗。大久保へ車6台で行った時は、途中で何台かが迷子になり大変でした。

「この指とまれ」支援活動

――しあわせの村やカレッジの状況は。

飯井 休校中のカレッジは、救援物資の集配拠点となっており、“がんばろう神戸”などのボランティア団体とともに、たくさんの学生さんが仕分けに参加。教室（国際・生環・福祉）には、2段ベッドが入り、佐川急便などの社員が泊まり込みで作業をおこなっていました。

後藤 しあわせの村は、自衛隊のテント基地と仮設住宅になりましたね。



カレッジ前に並んだ救援物資の輸送車

細野 2月に、クラス代表者会議が開かれ私も参加しました。4月から自主学習が始まり、教室には「被災者や地域のために何かしたい」という思いが溢れていましたね。そうそう、7月に事務局が呼びかけて、「この指とまれDAY」が行われましたが、飯井さんは「覚えていますか？」

飯井 「良く覚えていますよ」。これはボランティアグループの立ち上げを計画したものです。多くの学生有志が集まってくれ「何をするか」「何ができるか」「今必要とされていることは」…など、具体化に向けて話し合いを重ねました。

細野 この時、10グループが誕生、私も「子どもと遊ぼう」を結成しました。同時に、「ボランティアセンターを設置しては？」との提案があり、8

月に3人（岡 雄・多井温子・細野恵久）で立ち上げました。これが、今のボラセンとして引き継がれています。

―― 避難所や仮設住宅の状況は。

宮城 避難所へお見舞いに行くと、大勢の人がダンボールを囲いにして、その中で過ごしている姿が今でも目に焼き付いています。プライバシーがなく本当にお気の毒でした。

後藤 私の自宅近くは、公園や空き地を利用して仮設住宅が数多く建ちました。

細野 村には、2,000戸余りの仮設住宅が設置され、ボランティアグループにとっては格好の活動の場となりました。便利大工・カーボランティア・花作りなど、それぞれが特技を存分に発揮。これらの活動を通して、カレッジでは「ボランティア元年」という言葉が生まれましたね。

待ちに待った授業再開

――授業が再開した際、クラスはどうでしたか。

飯井 10月15日に、今井学長の講話があり11月から授業再開。震災から実に9か月半が経っていました。再開に対して、1期生と2期生では受けとめ方は違ったように思います。入学後4カ月足らずだった2期生は、退学した方も多かったと記憶しています。

細野 確かにそうでした。あるクラスでは60%までに減ったと聞いています。ただ、残った者は互いに励まし合い、結束を誓っていました。

宮城 震災による転居や退学、音信不通、その後亡くなった人もいて、私のクラスも減少しました。

後藤 私は1期ですので、震災による退学はなかったように思います。でも、長田区の火災で自宅を失ったクラスメートが、「北区に来ると別世界に来たようや」とつぶやくのを聞いた時は、返す言葉がありませんでした。

ボランティアは“心の張り”ですね



被災者で満員の避難所(長田区)

——当時から続けている支援活動はありますか。

細野 ボラセンの組織と運営の仕組みを作りました。同時に立ち上げた「子どもと遊ぼう」は、「子ども文化」に改称して、双方とも現在に引き継がれています。

後藤 人形劇や老人施設のボランティアに長年関わってきましたが、現在も続いているのは昔あそびの会だけとなりました。

宮城 メンバーの入れ替わりはあるけど地域の高齢独居者訪問、障害者施設の慰問は続けています。

飯井 当時から、出来ることがあれば参加するといった状態でした。継続しているものではありませんが、その時々に応じ出来ることをやっています。

当時の体験を生かして

——ボラ活動を通じて思ったこと、感じたことは。

宮城 震災をきっかけに始めたボランティア活動ですが、人との関係も広がり今ではボランティアが心の張りとなっています。

後藤 活動を通して良い経験が積めたと思っています。「ボランティアができるということは自分にとって喜びですね」。

飯井 ボランティアは、まず「私もやってみよう」と勇気を出すことではないでしょうか。

細野 「再び学んで…」を志す意思さえあれば、ボラ活動の有無にかかわらず〈わ〉のメンバーであり続けるべきだ、というのが私の信条です。

——当時の活動は今の生活(人生)に、どんな影響を与えていますか

後藤 カレッジで学んだこと、呼びかけに応じて活動に参加したことで、様々な経験を積み、たくさんの友達ができました。老後の生活に充実感を

感じています。

細野 私も同じくカレッジで学んだこと、震災に遭遇したこと、この2つは重要なポイントです。もしこの2つがなかったら、全く異なる人生を歩んでいたと思います。

飯井 生かされたことへの感謝と、生きたかった人への鎮魂を込めて毎年、1月17日には東公園の記帳所で、「命」と書いています。

宮城 様々な経験が役に立っています。折々に感謝できることや、他人の苦勞が少しは分かる人間になれたかな…と思っています。

——3年前からグループ〈わ〉がおこなっている東北支援活動について、感想を。

飯井 受け入れ側が、どこまで望んでいるのか、冷静に見極めることも大切です。現地に行かなくても、繋がりを持った地域への支援を忘れることなく、形を変えて続けていけば良いと思います。

細野 できることを、できるだけする、という



仮設で餅つきをする宮城さん

のがボランティアの基本なので、今の東北支援のやり方でいいですよ。

宮城 行きたい気持ちはありますが、体力に自信がないので、日赤や区会などを通じて募金を続けています。支援活動に参加している方に感謝です。——貴重なお話をありがとうございました。

●**座談会を終えて** ガレキの町で、先輩たちは「できる奉仕」を果敢に、懸命に実践しました。それが原動力となって、ボランティアセンターやグループ〈わ〉が生まれたのです。私たちは、先輩たちの思いを共有し、しっかり引き継いでいるのだろうか——。体験談に感動しながら、そんなことを考えさせられた座談会でした。

【文中に掲載の写真は卒業生からの提供です】

◆細野恵久さんは、2期生として入学しましたが、98年4月から1年間休学、99年4月3期生として復学しました。

東北支援活動に奮闘3年

神戸市シルバーカレッジとNPO法人グループ〈わ〉・こうべ市民福祉振興協会は、連携して平成23年3月から東日本大震災の支援活動に取り組んできた。グループ〈わ〉は23年7月から4次にわたって被災地へ在學生と合同の支援チームを派遣。田んぼの瓦礫運びや昔遊び、民謡などの公演を通して被災者や子供たちと交流を重ねてきた。カレッジでも募金や救援物資集め、体験報告会を実施。23年12月には女川の子供たちを神戸に招待した。振興協会も毎年、音楽チームを派遣してKSCチームと共演。〈オールしあわせの村〉として被災地の皆さんと固い絆を結ぶことができた。(グループわ広報・南形徹)



第1次隊 23年7月 南三陸の田んぼへ

第1次隊(17人)は7月18日～22日に宮城県南三陸町・大崎市・登米市へ。大型ライトバン4台に農機具と段ボール65箱分の衣類・雑貨・日用品など支援物資を満載。1200kmを走破し登米の避難所に届けた。

南三陸町では炎天下、9人が田んぼの瓦礫運びを手伝った。海岸から5km、山間の棚田なのに多くの住宅が全壊し、田んぼは瓦礫の山。柱、家具、丸太、台所用品、学用品、ボートまであり、手をつけられないほどの惨状に暫し立ち尽くした。3日間で3反ほどを片付けた。

残る8人は、大崎市などの幼稚園・小学校・児童館を回り、子供たちと昔遊び・紙芝居・マジック・歌を楽しんだ。2か所で振興協会チームと共演した。どこでも大歓迎され「こんな笑顔の子供たちを初めてみました」と保母さんたちにも感謝された。

最終日には地元の大学教授の案内で、南三陸と石巻、の被災地を見学した。鉄骨だけのビルが無残な姿を晒し、見渡す限り瓦礫の山が広がる。子供たち70数人が大津波にのまれた石巻の大川小学校。泥まみれの机がわずかに残り、祭壇には花やおもちゃ・漫画、学用品・

飲み物が供えられ、多くの人が涙ながらに手を合わせる姿が見られた。私たちも涙がとまらなかった。

●訪問先 大崎市のNPO田んぼ。南三陸町入谷の棚田。登米市米山児童館、中田児童館。大崎市大貫小学校、登米市迫児童館。登米児童館。大川小学校跡。

●1次隊メンバー ▽わ本部＝道満俊徳(生13・団長) 芦田義和(生15) 渡邊佳規(生12) 南形徹(生14・広報) ▽内村ナナ子(国18) 平林啓子(音18) 水島和信(生12) 清野明(生13) 小澤輝彦(生13) 片岡隆夫(国17) 海野龍英(食16) 内田たみ子(福10) 増金スミ子(福11) 古後健一(福18) 飯川泰郎(国12) 大澤貞男(生13) 黒本茂弘(食13) ▽振興協会同行＝入江敏行(福8) 新小田収(福8) 田邊瑩子(福12) 【写真 南三陸での田んぼ作業】

第2次隊 10月 仮設住宅も訪問

第2次隊(15人)は23年10月15日～19日に女川町・石巻市・東松島市・名取市を訪れ、仮設住宅・小学校・幼稚園・児童館で計11回の慰問活動をした。現地から「心のケアをしてほしい」との要望があり、昔遊び・紙芝居・マジック・大道芸・民謡・童謡を中心としたプログラムにした。

仮設住宅での公演は初めてだったので戸惑うことばかり。事前にポスターやチラシを配布していたのに集



まりが悪く、三味線をかき鳴らして住宅内を回り、マイクで呼び込みをした。でも、始まってみると皆さんノリノリ。「初めて近所の人と話をした。半年ぶりで民謡を歌った」というお年寄りも多く、メンバーも感激の面持ち。150人の子供たちが迎えてくれた幼稚園もあり、メンバーは連日てんでこ舞いの大忙しだった。

牡鹿半島にある女川町は、道路事情が悪く陸の孤島状態。満潮になると道路が冠水するため、宿舎との往復は潮時表を見ながら、といった有様だった。名取市閑上地区は平地のため、家も学校もすべてが津波にさらわれて見渡す限り何もない荒野。見学した私たちは暫し言葉もなかった。【写真=23年10月、名取市増田保育所で】

●訪問先 女川町復興センター。石巻バイパス東・西仮設住宅。女川町清水・新田仮設住宅。東松島市花房幼稚園。石巻市東浜小学校・萩の浜保育所。名取市増田保育所。名取が丘児童センター。名取が丘保育所。ゆりが丘児童センター。

●2次隊メンバー ▽わ本部=西田圭一(生9・団長) 道満俊徳(生13) ▽大澤貞男(生13) 内田たみ子(福10) 増金スミ子(福11) 飯川泰郎(国12) 古後健一(福18) 中村宏栄(福9) 高木良治(福10) 田邊瑩子(福12) 波多野武郎(食16) 黒本茂弘(食13) 南形公子(福13) 海野龍英(食16) 内村ナナ子(国18)

第3次隊 24年7月 銭太鼓も加わって

第3次隊(17人)は24年7月7日~13日の日程(6泊7日)で、女川町・石巻市・名取市・仙台市若林区を訪問。仮設住宅・小学校・保育所・児童館など15か所を回り、昔遊び・紙芝居・マジック・大道芸・銭太鼓・民謡を中心としたプログラムで、一緒に遊んだり体験してもらったりした。銭太鼓メンバーが初めて参加、子供たちに大もてだった。西区竹の台小の女性教諭が

◆メッセージ交流 支援チームが訪問する小学校や児童館・仮設住宅には、神戸の子供たちが書いた激励メッセージを届けている。第1次~3次を通じて、44校園から寄せられた約200枚のメッセージを女川、石巻などの24校園に贈った。今では神戸と被災地の小学校や児童館同士の交流も始まっている。

同行した。仮設のお年寄りとは顔なじみになり、話が弾んだ。福祉振興協会もプロの歌手・花城アリアや女性パフォーマー、体操のインストラクター、職員ら6人のチームを派遣。3か所で共演した。

最終日には、石巻市の亀山市長と仙台市にある生涯学習施設「豊齢学園」を表敬訪問した。豊齢学園とは「今後、いっしょに活動しよう」との約束ができた。

【写真=24年7月、女川町で仮設の皆さんと銭太鼓の演奏】

●訪問先 女川町復興センター。女川町清水・新田仮設住宅。石巻バイパス東・西仮設住宅。女川第二小。石巻市東浜小学校・萩の浜保育所。名取が丘保育所。名取が丘児童センター。名取市増田保育所。名取市ゆりが丘児童センター(振興協会チームと共演)。仙台市若林区東六郷小(共演)。六郷児童館(共演)。石巻市役所。仙台の豊齢学園。

●3次隊メンバー ▽わ本部=西田圭一(団長・生9) 芦田義和(生15) 海野龍英(食16) ▽内田たみ子(福10) 増金スミ子(福11) 飯川泰郎(福12) 水嶋和信(生12) 波多野武郎(食16) 古後健一(健18) 三浦捷治(国10) 三浦良子(国9) 阿部和子(福11) 林弥生(国13) 山田保子(音13) 筒井ちなみ(音17) 安田夫市(健17) 大和川明美(音18) 【振興協会チーム】 佃孝司(団長) 花城アリア、ドレミちゃん、体操インストラクターら6人

第4次隊 25年7月 七夕飾りを作ろう

第4次隊(8人)は25年7月2日~6日に女川町・名取市・仙台市若林区を訪問。体育館や仮設住宅・小学校・保育所でスポーツ大会・料理交歓会・七夕飾り制作などを楽しんだ。今回は仙台の生涯学習施設・豊齢学園との連携プレーが実現。福祉振興協会・18期G学習チームも加わり4者協働の賑やかな慰問活動となった。

女川町体育館でのディスコン大会(ディスクを転がす軽スポーツ)には、お年寄りや障害者ら50人もの参

◆記録ビデオ作成 東北支援チームの活動ぶりを記録、保存するため『震災ボランティア奮闘』のタイトルでDVDを作成、体験報告会で上映したほか友好団体に配布した。第1部~第3部まであり各17分。映像撮影は水嶋和信、古後健一、黒本茂弘らが分担。ナレーションは内村ナナ子、筒井ちえみ。編集は南形徹が担当した。



加があり、豊麗側も私たちがスタッフは汗だくだった。3日目は仮設住宅と女川小で仙台の伝承七夕飾り制作。豊麗スタッフの指導で、華やかなミニ飾りが次々とできあがり「わあ、きれい」。大人も子供も大喜びだった。＝写真は出来上がった七夕飾りに大喜び。4日、清水仮設で4日目は2班に分かれ、A班は女川町の仮設で仙台男の台所チーム、地元の30人と一緒に料理交歓会。神戸は水餃子とおにぎり。仙台は手打ちそばと卵焼きのメニューで、ワイワイがやがやと食べ比べを楽しんだ。B班は名取市閑上小へ。津波で流され間借り校舎だ。豊麗のお手玉チームと組んで一緒に昔遊び。仙台の六郷児童館と名取市の増田保育所でも子供たちと踊ったり風車を作ったり楽しい時間を過ごした。

【訪問先】 仙台豊麗学園、女川町体育館、清水仮設住宅、浦宿仮設住宅、女川小学校、名取市閑上小学校、増田保育所、

田んぼ作業の朝

内村ナナ子（国18・1次2次隊に参加）

初めて田んぼ作業へ行く朝でした。ホテルのロビーで長靴に鉄板入りの中敷を入れてみると、ソファーにいた老婦人2人が不思議そうに見ていました。私はてっきり旅行客かと思い、「どちらから、いらしたのですか？」と声をかけると、「私たち南三陸から来た避難者なんですよ」と思わぬ返事が返ってきました。お二人は75歳と73歳の友人同士。家も、田んぼも、家財も流され、隣人たちの目の前で次々と津波にのまれていったそうです。

「今まで一生懸命生きてきたのにねえ…。でも、命だけでも助かって…ありがたいと思わなくてはいけません。私は、こみあげる涙をこらえながら、話を聞きました。ここで、もう2か月も仮設住宅へ入居できる日を待っているそうです。「あなたたちも、遠い神戸から来ていただいてありがとうございます」と、やさしい声をかけてくださいました。[こんな方たちが何万人といるんだ。私も力いっぱい何かをしなくちゃ]。お二人と手を取り合って別れを惜しみながら、重い長靴に足をとおして、元気よく作業に出かけました。

仙台市六郷児童館（振興協会とG学習チームは一部別行動）

【第4次メンバー】南形徹(団長・生14)海野龍英(リーダー・食16)片岡隆夫(国17)増金すみ子(福11)大澤貞男(生13)内村ナナ子(国18)板谷純子(生18)▽留守部隊＝芦田(生15)波多野武郎(食16)田路義弘(生17)

▽カレッジ事務局＝糸原純▽振興協会＝吾郷信幸、佃孝司、駿河明子、エスケール音楽チーム5人、ドレミちゃん、体操2人▽健福18期G学チーム5人。

●第4次チームは、仙台豊麗学園（豊麗ネット）と協同しておこなった初めての活動でした。スポーツ大会、手料理交歓会、仙台七夕飾り制作をメインに3月から準備を進め、なんとか実現にこぎつけました。「やってよかったね。まずまず成功だね」。課題は残るものの、私たちが豊麗側も協同で活動する第一歩が踏み出せたとの思いを深くしました。カレッジ事務局の糸原マネージャーが同行、豊麗側と懇談されたことで、KSCと豊麗が連携する機運も生まれたのではないのでしょうか。（南形）

募金や女川の児童ら招待

現地へ支援隊を派遣する活動と並行してカレッジでは募金活動などの〔後方支援〕にも意欲的に取り組んだ。23年3月の大震災発生直後から救援募金を始め、約50万円を振興協会に寄託（振興協会は約3400万円分の救援物資を被災地に届けた）。6月には35万円分の農機具・雑貨・野菜の種子などを大崎市NP0田んぼに贈った。衣料・日用雑貨など物資の提供も会員・在学生に呼びかけ、7月には段ボール65箱分を第1次隊に託して登米市の避難所に届けた。

24年10月からは支援チームの活動資金に充当する「サポート募金」を実施。約90万円が寄せられた（25年度も継続）。卒業式・入学式などでも募金を呼びかけ、あしなが育英会などに寄託した。

23年12月10～12日には石巻市東浜小と女川第四小の児童ら25人を神戸に招待した。ルミナリエや須磨水族園、明石大橋、王子動物園を見学して、しあわせの村に2泊。西区竹の台小では、地元の藍那小の児童も交えてミニ運動会をして交流した。毎年、クリスマスにはこれまでに訪問した児童館・保育所など十数か所へ学用品・日用品などをプレゼントして喜ばれている。

支援の輪を広げようと、派遣チームによる「体験報告会」も23年11月と24年11月にカレッジで開催した。メンバー7～8人の体験発表、女川・石巻からゲストを招いての講演、記録ビデオ上映などの内容で、毎回300～400人もの参加者があった。東北物産販売も大好評だった。（25年10月には震災シンポジウムを開催予定）

◆ボランティア奮闘記 第1次～3次の支援チーム43人の感想文集。壊滅した被災地を訪問して何を感じたのか。被災者や子供たちとどんな話をしたのか。約50枚の写真と共に、広報誌などに公表されていない個人的な思いが綴られている。第3集まで発行。

1993年（平成5年）

- 5. 6 第1期生募集
- 10. 1 開学 第1期生（440名）入学式

1994年（平成6年）

- 6. 1 第1回学園祭
- 2. 1 カレッジ情報誌創刊号 発行
- 9. 1 第2期生（390名）入学式

1995年（平成7年）

- 1. 17 阪神・淡路大震災が発生。10月末まで休校。
学生（6割が参加）によりボランティア活動始まる。
しあわせの村が災害救援活動の拠点になり、カレッジは救援物資配送センターとなった。学生は温泉センターや物資の仕分け作業に従事。
- 7. 10 「この指とまれ」方式で、ボランティア有志を募り、10グループが活動開始。
- 11. 7 カレッジでの講義再開

1996年（平成8年）

- 4. 11 第3期生（433名）入学式、以後、春入学に変更
- 9. 17 ジョイラックディを設ける

1997年（平成9年）

- 3. 20 第1期生卒業式（319名）
- 7. 22 神戸市シルバーカレッジ社会還元センターグループわ設立

1998年（平成10年）

- 5. 会員用情報誌「わ つうしん」第1号を発行
- 8. 明石海峡大橋の完成に伴いJR舞子駅で観光案内と清掃活動を始める

1999年（平成11年）

- 5. 17 グループわ 第1回定期総会を開催



08年10月
わの
マーク
制定

2001年（平成13年）

- 1. 神戸市復興記念イベント「花と光」に参加

2002年（平成14年）

- 9. KSC開校10周年記念事業に参画、パネル展示他

2004年（平成16年）

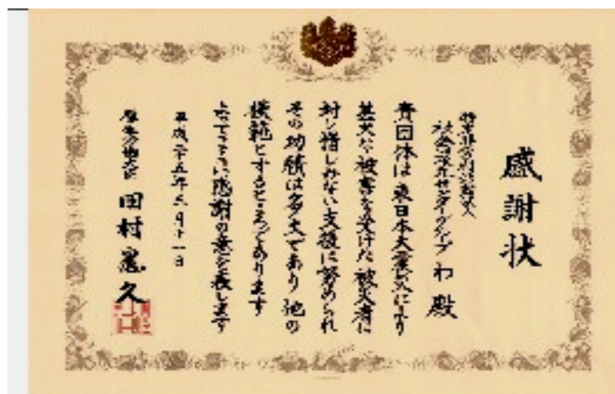
- 4. 27 グループわ NPO法人として認証される
- 5. 5 神戸市シルバーカレッジ社会還元センターグループわ 第6回定期総会及び新発足の、NPO法人社会還元センター グループわ 第1回定期総会開催
- 6. こうべ環境未来館の受託業務開始
- 10. 16 グループわ 環境学習活動で神戸市環境功労賞を受賞

2005年（平成17年）

- 3. 神戸市教育委員会から「トライやる・ウィーク」への協力・支援で感謝状を受賞
- 7. 神戸市から、こども家庭センターの電話相談受託
- 9. 市民福祉向上の貢献で神戸市長から市民福祉奨励賞を受賞
- 9. 15 高齢者社会参加活動の模範として内閣府特命担当大臣より「参加章記念盾」を受ける

2007年（平成19年）

- 3. 神戸市から、いじめ電話相談事業受託
- 4. 須磨一ノ谷プラザ管理運営スタート



9. 1 グループわ設立10周年記念事業式典開催

2009年（平成21年）

- 12. 賀川豊彦献身100年記念委員会から真愛ホームへの奉仕活動で、中央区会が第1回賀川賞を受賞

2010年（平成22年）

- 5. グループわ顕彰制度発足。個人（5名）・グループ（2団体）を表彰
- 10. 兵庫県「里山ふれあい森づくり（住民参型）」助成事業に環境部会が参加。事業スタート

2011年（平成23年）

- 3. 11 東日本大震災が発生。
- 4. 12 グループわ、「東北支援プロジェクト」をスタートさせ、義援金募集開始。
- 4. 「車椅子テニス国際大会」支援
- 7. 18 第1次東北支援隊17名を南三陸町、大崎市、登米市へ派遣。カレッジからの支援物資を65箱届ける
- 10. 15 第2次東北支援隊15名を女川町、東松島市、石巻市、名取市へ派遣
- 10. 30 第1回「地域交流と文化の祭典」実施
- 11. 20 第1回神戸マラソン」に、一ノ谷プラザが協力。
- 11. 22 第1回東北支援報告会を開催。
- 12. 10 東北被災地の東浜小、女川小の児童ら23人を〈わ〉が神戸に招待、市内小学校と交流会実施

2012年（平成24年）

- 7. 7 第3次東北支援隊17名を女川町、石巻市、名取市、仙台市へ派遣
- 12. 神戸市長から学童支援事業に対し「神戸の未来を担う子ども育て賞」を受賞

2013年（平成25年）

- 3. 11 厚生労働大臣から東北支援事業 に対し「大臣感謝状」を授与される（別掲写真）
- 7. 2 第4次東北支援隊8名を女川町、名取市、仙台市に派遣。仙台の豊麗学園と協働で支援活動にあたる
- 10. 9 神戸市シルバーカレッジ開校20周年記念式典開催。記念碑「再び学んで他のために」序幕。グループ〈わ〉は記念シンポジウム「阪神から東北へ…K S Cの震災支援活動」で参画



この事業は「公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構」と「ひょうご安全の日推進県民会議」の助成を受けて実施しています。